B 8

現代の子どもの生活技術調査

鎌倉女大家政　谷田貝公昭　市立鳩ヶ谷小　村越見　県立芳ヶ崎西浜高
○佐藤野里子

目的　子どもはその、成長、発達段階に即した、生活技術や習慣を身につけながら育つことが望まれる。しかし最近の教育現場では、子どもたちの手さばきが乱れているのではという声を多く聞く。生活技術、習慣の形成が不十分なことが、子どもたちの生活や学習に様々な歪みをもたらしている原因ではないかとも言われている。そこで、小学生を対象に、生活技術の調査を行いその実態を把握することを試みた。また本調査は二地域で行った。この結果を比較し、地域による実態の違いについて明らかにすることも試みた。

方法　昭和63年8月名古屋市で1224名、同年12月沖縄県で897名の小学生を対象に調査を行った。調査員が対象児と一対一で面接し、調査項目の技術を行わせ、判定した。同時に各項目の実技について、過去の経験の有無を質問した。項目は、ライターで火をつける、マッチで火をつける、安全ピンをとめる、食器を並べる、食器を持つ、針に糸を通す、ペットボトルの蓋を開ける、傘を開いてたたむ、ドライバーでネジをとめる、缶詰めを缶切りで開ける、缶のプルトップを開ける、ナプキンで弁当箱を包む、以上十二項目である。

結果　弁当箱包み、ネジとめ、マッチ、食器並べ、缶詰め開けなどの項目は結果が悪かった。便利な道具が普及し、安全等に対し過度に保護的と言われる現代の家庭や学校教育の影響で、生活上の基礎的な経験が不足し、できなくなっていることが考えられた。二地域では、食器並べなど数項目で実技に差が見られた。これは本質的な手技の優劣よりも、親等のしつけの姿勢、経験の与え方の差によるところが大きいと思われた。それは両地域とも弁当箱包みなど手技や経験を多く必要とする項目の結果が悪いことからも考えられる。